





鳳芳山先生文集

致也

但

居



空のま

とす

湘女心を華に心印

三原信の子も志あやうは

くくくくくくくくくく

をいり此算きくあはれ

贈送謝もくくくくく

通直發句印あはれ

秋の色くくくくく

大原北陸水小結唐ひさ

十の

巻

四

遠くもれくある世に

は世に作らぬと云ふは、
うらな味にせし

天宮も亦くも字之小

この一も又、一宗の碩学
と云ふ

時流を報ひて行ふ者

大雨は亦も怒と云ふ

不被る世をく物成り神

池物此も氣を成る風

今は亦くは行ふ麻福を

并指のまじや

消息も恥く世に書あそく

此くは世も亦くは利

後宗も亦くは世に書

者この日の字不付心

月乃擗れ男くくく

名もくは世も亦くは利

一寸の

みよも亦くは世に書

世に書

三井も亦くは世に書

當のれも亦くは世に書

如子法く秘んと物登要法

嗚也連弁此念也之思ん

新清り念と入新に河

神々塔り袋も結梅り

射去其雅氏迄以軍場

以風も案小形以乃法信

野干成留く名と之高者

多難成つ云是法某種也

氷餅也 新子六月

當年もいきて通成く生多也

貝此始カ心が成る 心多也

御地多入来るも月此物に

さいの川原也 多信り

河く野も懐と祀もた多也

射干人

中一多と一多と

一多勿語して

地多系八并字も

け継云弱く

紫雲此を以て一書に

三
此書は經人の題小記

者成始終の経路能

否とてすう稱とて授

明とて列せしむる後不

忘れ月もかゝる形も

能云

一書に

露の多なる中氏

一書に

一書に

一書に

世の心も移るこの月

付心不ち他とあり

証するん一書に

一書に

神も養自の役者

付自と云ふは

鈴鹿の地名

しつ 遠くも伊勢に道つと

目よ向ふ方へ月に入まを
伊勢の月よこしをみよ

櫛木は枝を菊のしり

鳴梅も今成はんと先白

流るる

みまのゆらぐりて秋の風

はるのまより耳列

川もゆきの里小るあは

大坂いづく月を何時

難いまきくお原の虫乃声

海より

二人競るる秋はあは

日向

桐葉と月がとゆふさうの合

糸乃神も行くはるる

うつろき錦け思ふはゆ

馬さくそせの山崎をる寺

盛るけは傷の花をんあ

能く

鳩の杖も法もはくも余り

名

能くも

川よけの奉りては見しに

五宗と贈りて

新しけし道にゆくちり水

水園まじりて難儀も接の道

方へは錦成糖も老成も

おぼろげな年ふび合し悲心

一百老まじりて

こころもいかにあはれきり

こころもいかにあはれきり

屍も道帯になまや男氣

宮崎も人知れぬしに近道

近道も男も不おぬ人

おぼろげな道も解る市町

おぼろげな道も解る市町

死も病れもいかに

えれ家の道もたなも思はれお

若鏡の露もとくは遠きは

あはれ有もつこと

物垣もさけく在りの方垣り

付心不義知く毎度言々主簿は

お見の具れ何りお中り

口惜し

下子成るこれ文箱の陰波小

茶臼煮くまうしは有煮くは

象は茶高波かこの帰入

是れ

花中花ももつてお花心

一りてははあは無人うさひま

大姉くの美やさあそむんじ

御さう

引玉れ先へ後をさる小

あそびはさる乃聲

御さう

付墨井七句

此内長三

大坂住

政也判

四ノ山乃新代集々都也

長治

居方くくく奇乃却向去表

奇乃くく却向去表

弓取々又乃通々く生案そ

奇乃二又の通々くく

神形唐もやなん乃久さん

弓取三何の久さん

志砂地小砂んと通じし

秋大根乃杯入るるさ

十月此のまわり娘山月紅等

重湯とく鞠とりのゆは

遠れとてはとけり乃は念ふ

念ふ石舟なり

半くけりれをわたりさうりやき

公家府と盛候と武家府と

風吹りや度きやうこ

空乃きしきちよふいそお

思ふやのきしきちよふいそお

遊女乃舞よはゆりさし

三浦海乃とと光夜

やうたうがとつゆのさゆ

をいふとれ聲ひりくがは

勝乃耐とともをがし

通とてはとけり乃は念ふ

秋とてはとけり乃は念ふ

大原の法より欄房むし

法華のまがくがはるる

おもしろの法ありとけく又たるるや留
法仲の宗心之白てきい

春空と空の思学よ

明かふを報とつるの

大雨乃きと極也中海海

左報ニ大さし合

不破乃きまの物りし袖

川のたよりよ気まのなる流

今けふ乃ひ波の麻福を

清息と初と息れと書にきて

なりしとくもやと能利

後まよりきりもと方お川

月乃極の男とくし

えがくさ思書とまのりし

一白やしし

み家目とまのりしつと

細き

三好の人海とまのりし

よのほろを移しなく物そあはる

六
雙と連弁のよきやまてん

行後入念やの家いわ

下の七文字何しんか

祓くの守り袋と結解り

射先の難とのうら軍場

吹風も宗小形法の法信

一石のしんか

やん成帯くみそとまろれ

室機次流のよき花経也

やうんを愛付のいし

水母あし移り六月

割年よきまてんか

目元が若かなげら

水地帯へまはる月乃若待

さい乃川原也何日

何く野乃懐中花とたまひ
懐と花もたまひくといふ

紫雲乃やうり一巻し何

美の事や権尺の題し記さじ

者代娘は終る波能

多とよさうら願はすと板

野と高列さうし終る霞示

忘れ月とさうら終る也海を

やうら終る一板を秋も

後秋もさうらへ

霧沖の介は平氏の落景

くまの足ゆりたれ家雲のわさ

と市小世はまののさ

は九月や祢さうし三月

空とち小ニワれりしとんた
根のたれさうしとんた

遊ばぬんし小南はさのさ

花のさうらへ

神と養自の役者定めり

鈴鹿山の名のし終る院

付心る

院

まうしつるや伊勢乃道り

目ふゆまふ心乃入きし祢

名はつとまふ目ふゆまふ

櫛本乃枝と南さうしつ

咲梅を今以まふと先自心

おののけむしんの字い

みとのあちりしりまのちを

川舟や伏見の里よさめしん

大坂いてく月ハり時

遊多ハまうしつく野原は

何時ニ遊多ハまうしつく野原ハ

二人籠まうしつ秋の草

相撲以ハりしつとふ

奈の神を初ハりしつ

奈の神ハ初ハりしつ

う川くまき鋒の思ハりしつ

鋒の思ハりしつ

長道ハりしつ

鷹ハりしつ

鳩の杖波色はくけくを穿つ

川よりの春の土は目もとわたり

土原ニありてありてあり

割とけし道はくけくを穿つ

水國をいづく難儀も極乃道

いづくちありありあり

身なりし錦波は極乃老或も

お道しとく人年よ似合て忘る

若三年ニ似ありて用こころ

いづこいづこ入る路は極乃

お道しとく人年よ似合て忘る

庵の道は極乃道は極乃道

いひを男なり

喧嘩もど恥波色いづく道

男氣ありていづく道は極乃道

お道しとく人年よ似合て忘る

お道しとく人年よ似合て忘る

お道しとく人年よ似合て忘る

お道しとく人年よ似合て忘る

慈徳と云ふは色と云ふは道徳也

初彦と云ふは古江の事也

蛇の目と云ふは蛇の中へ

下は成ると云ふは蛇の尾に

家の景も蛇と云ふは蛇

蛇と云ふは蛇の中へ

大蛇と云ふは蛇の中へ

おぬぬぬぬぬぬ

何と云ふは蛇の中へ

おぬぬぬぬぬぬ

蛇の中へ

付墨卅句

内長一

堺住

長治判

正友
室方山花散集く都代

君うつくしきの歌白きふら

弓取の文は道まてと保りて

湯の石唐とわかんの歌さふ

心うつくし

美砂地ふぶんと遊びまじ

琴のひき声のまを今時

好大根乃経入んくさ

十日れあきらめ嬉しく月のみ

武陽のく鞠のく

尊のく

五麻心

公家

公家

風

刻

押

女

三味

少

全

付

胸

思

心

秋

大原

五字

清くも明くも好む世に作

二

天香も亦くも好む世に

時の去敷ハいつも山也

大雨は若も板も浮きし

不致の世もくも抽き少種

織物此等氣と成志風小

今けふ及んば乃麻福左

トの字を附せし

消息を他くも種書何ぞ

なり〜の〜も〜は〜種利

後京不すりきるもも乃我別

トの字を附せし

月名掛乃男〜〜〜

トの字を附せし

元〜〜も〜も〜も〜も〜も

凡〜〜も〜も〜も〜も〜も

消息の字を同表せ

三〜〜も〜も〜も〜も〜も

子はく新んと物もあはる

新とくしん

晴も連舟の命もあはる

新橋より念代の家あはる

新橋

神くあはるり命もあはる

射矢は新とく遠方軍場

吹風も雲下新とく徳信

野平とあはるり命もあはる

新とくしんあはるり命もあはる

氷餅あはるり新とくあはる

當年もあはるり命もあはる

目れはの介あはるり命もあはる

新とくあはるり命もあはる

あはるの川原やあはるり命もあはる

あはるり命もあはる

夢を以て之に下て之を以て

三

秋夜より人

昔は夢の中を遊んで居る人

夢は皆夢に過ぎぬ

夢は皆夢に過ぎぬ

昔より

夢は皆夢に過ぎぬ

○ 夢の月も如く影も如く

夢は皆夢に過ぎぬ

○ 夢は皆夢に過ぎぬ

夢は皆夢に過ぎぬ

夢は皆夢に過ぎぬ

夢は皆夢に過ぎぬ

月より

夢に

夢は皆夢に過ぎぬ

神も養国の使者定あり

鈴鹿山に名のとて松尾一徳

以てはるる作はた遠くまで
或るひよふ方へ心はなきを祈
橋本は枝を菊さうすう
嘆梅も今と昔へと見自
みとのあらうらむるは風
川も伏見の里小宮の
大坂いづく所を何時

難はきくく野原は虫のさす

二人遊むは旅のさす

相撲とたかた守小ころの谷

祭は神を祈りてはるる

此神たしと名神いみ

ふりくさ餅の鬼よけ神

馬車とやせむの寺

嵐はくは橋のたもと

鳴乃杖もほろけぬと

本家たふさし

川の子のまゆひの目も

本家たふさし

刻とけし道ハお家ト大少

山をひと難儀な縁の道

力ハ錦波難者老民ト云

驚とて月舟小似合と悲心

いさよとく人の心もあはれ

はる意もあし

ゆきもあはれは程よあはれ

庵も道草ハなほとわらわ

いさよとく人の心もあはれ

おはせしや觸り市町

おはせしや觸り市町

死く病乃あはれいさよ

云の雲の道ふたふと月の後

若しくは

初は

燭の

下は

此の

家の

花の

大母

此の

お

お

付墨貳拾五句

此内圓四

伊勢山田住

枚木正友判

竹犬

軍方山花紙集く抄作

連芳の四返をいふ

居るうらうら奇に歎回志るを

引取交は通きて世閑そ

降は序もやあんのうを

美祿地小印んと通ひよ

秋去程の祢入見るは

十月にありわ娘い月は

武陽さく鞠と僅し
 道^ウまはつて河原に後念
 半^ウかき捨りのまがたを
 公家も感徳を武吉は
 風吹りくと房のまがた
 空にまきちるまがた
 極女は舞ふ心むく

三味線はも志の度が
 心くさくまがたのま

名はこれ舞とまがた

勝徳鞠のまがた

鞠のまがた

道とまがた自心

道とまがた

秋をかくしに

大原に清水不独房

水

葉

清道くも取くを以て在作
二
吞哈も心小く無字小
時比左報を以て有りて
大雨乃去を以て板中と改道し
不彼れ其く物と少種
依細の唯く気と必出風小
今は小及びく以麻福左

消息も知く無種書何事
取く子と也也と修其利
後宗小其りきり者も大井川
月比樹の男とくくく
元おくさ無種も去りし
み家目と出く小露れと書
三寺より母小く其れと書
無種

以子法く福んと物も薬房
曉も連^ウ奇^ウ今也^ウて^ウ是
新^ウ袴^ウり^ウ念^ウ也^ウ入^ウ家^ウ也^ウし
非^ウく^ウ城^ウ也^ウ家^ウも^ウ結^ウ構^ウ小
射^ウ夫^ウの^ウ難^ウと^ウ此^ウの^ウ軍^ウ場^ウ
明^ウ風^ウも^ウ閑^ウ小^ウ形^ウ此^ウの^ウ徳^ウ傳^ウ
聖^ウ干^ウ武^ウ當^ウく^ウ名^ウも^ウ高^ウれ

重^ウ難^ウ浅^ウつ^ウ云^ウ先^ウ於^ウ某^ウ難^ウ也^ウ
水^ウ解^ウ也^ウ一^ウ粒^ウ子^ウ六^ウ日^ウ
尚^ウ年^ウも^ウい^ウき^ウま^ウす^ウ其^ウ後^ウ生^ウ多^ウ

目^ウは^ウ智^ウて^ウ三^ウ九^ウと^ウし
御^ウ地^ウ勢^ウへ^ウ幸^ウ給^ウま^ウし^ウ奉^ウり^ウ給^ウは^ウ

さ^ウの^ウ川^ウ原^ウ也^ウあ^ウは^ウ道^ウ作^ウ候^ウは^ウ
あ^ウら^ウし^ウ野^ウ々^ウ煙^ウと^ウ都^ウも^ウた^ウら^ウふ^ウは^ウ

下^ウり^ウい^ウし
英 英

紫雲寺に在る小一庵の所

三

報者打りし

此寺の經典の題名記述は

善代と云ふ所は後汲能

不盡もさうさうの廟と云ふは

まゝに記述し

野との所はさうしたる後を

定け月もさうな所と云ふ

やうありし様ハ秋も終

下の寺りし

刻神のまゝに記述し

此の寺の所はさうな所

と云ふ所はさうな所

此の寺の所はさうな所

此の寺の所はさうな所

此の寺の所はさうな所

此の寺の所はさうな所

對之ては 長江邊に道あり

目小に 舟をこぎ 渡る人あり

橋本に 枝を 垂らす人あり

嘆梅も 今頃 花を 散らす

梅の花散らす

夕陽の 影を 長く 伸ばす

川を 渡る 舟の 影を 見よ

大坂の 月を 見よ

誰か 舟を 渡る 影を 見よ

二人 舟を 渡る 影を 見よ

相横に 舟を 渡る 影を 見よ

茶店 舟を 渡る 影を 見よ

舟を 渡る 影を 見よ

舟を 渡る 影を 見よ

舟を 渡る 影を 見よ

鳴り杖とて流るる也

川名の春の流るる目も知らず

新名の流るる目も知らず

出園名の流るる目も知らず

外名の流るる目も知らず

新名の流るる目も知らず

新名の流るる目も知らず

流るる目も知らず

流るる目も知らず

流るる目も知らず

流るる目も知らず

流るる目も知らず

流るる目も知らず

流るる目も知らず

若くは此の書に記す所の如く
物置の事も亦記す所の如く
蛇乃貝れあゝ想伴く
下子成るれ文箱の繪後付
家此景高深くは婦人
都くは花若くは何も
引揚ぐは蓋やとあゝ女は

あゝ玉れ先へ移はさる
夢て悦ぶ當れ聲

引墨貳拾句

内長壹
圓貳

竹犬判

亂胤及山に巻紙集く都

都の作む

亂ありて奇に趣向を

弓取を文通すくも深うて

帰於原とやなんのくま

其砂地不立と述むとく

詩のくまよりおぼしく句他を海
翠川にまゝ不似今述むるを

秋大根に糸入る事さ

程なき細かくいふ

十月にありて娘い月れを

主陽さく鞠さく

後世の事

此の語は古く

事かたけりた

公家府も威儀

風吹くとも

利かたき

遊女も

三味線乃

心くた

女かた

胸乃

通直

好も

御

大原

此の語は古く

遠くへ行くはなはた遠く

二 乱るるはなはた乱るる

時を去るはなはた時を去る

大に雨はなはた大に雨

石段のせきく物さく神

縁物のなまぬきく物さく

今もふ及ひはなはた麻福を

消息も知るはなはた消息も知る

此の世もなほなほ此の世も

幾もなほなほなほ幾もなほ

月乃うらなはなはた月乃うら

元はなはた元はなはた元はなはた

み家の代もなほなほみ家の代も

三井もなほなほ三井もなほ

三井もなほなほ三井もなほ

三井もなほなほ三井もなほ

如月決之御入也 楠持事乃

晴も連弁の命也之とらん

初禱より念と今いあ

能く忠立ちり 倭も此指不

射矢乃 難代 遠家 軍場

楠持事乃

明風も 周小 形乃 の 徳 傳

列ん 次る 之 名 我 言 也

雲 難 之 流 之 是 乃 事 終 也

秋 解 乃 一 終 乃 六 月

南 年 七 月 迄 是 乃 終 事 也

月 此 始 乃 乃 終 乃 終 事 也

御 地 終 乃 乃 終 乃 終 事 也

さ 乃 の 川 原 也 長 信 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

紫雲をたふさぐ一雲の

三
紫雲をたふさぐ一雲の
紫雲をたふさぐ一雲の

青波のうねりもあはれ

雪もあはれもあはれ

明のついでに

うねりもあはれもあはれ

剣のついでに
秋のついでに
橋のついでに

し
雲のついでに

し
雲のついでに

し
雲のついでに

雲のついでに

し
雲のついでに

し
雲のついでに

し
雲のついでに

し
雲のついでに

以 河名也 伴路 此 乃 彦達

魂のこころはあや

淵 仰 方 心 の 入 幸 祿

目印ありてはしこし

檣 本 此 枝 乃 菊 乃 乃 乃

入世初てこゝ又而る

唯 梅 も 今 汝 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

川 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

大 坂 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

誰 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

二 人 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

相 續 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

むん入さる

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

五條を露もいと道も

湯煙もはらう家のい

蛇の目えらら中しく

下レ成らるる箱の陰ヤ

家乃景も波かたの婦人

花よりレ花を中てのわ花

おゆくのまゝのいん

わに徳先へ終らそい

すくねりかきかた

付墨四十三句之内長五

下を句を移さうくくの巻を

胤及軒

坊窈子判



